

「英語科教育法 I」—授業目標の達成度の評価を中心に

英語教育・池野修

1. 授業内容

「英語科教育法 I」は、本格的な英語教員養成の第一歩となる授業であり、効果的な英語授業を行うために必要とされる専門知識・技能の習得を支援することをねらいとしている。英語教育目的論、「国際語としての英語」を巡る議論、学習指導要領、英語授業の構造、学習指導案、英語授業での指導技術（e.g. warm-up 活動, oral introduction, 音読指導）などのトピックについて学び、グループ討論、ビデオによる授業分析、学習指導案の作成、言語活動の体験・分析などの活動を通して、授業構想力と授業省察力を育てる。なお、2008年度の受講生数は42名であった。

2. 授業評価

授業評価は様々な観点から行うべきであるが、この報告書では、「授業目標の達成度について受講生がどのように捉えているか」という点を中心に、調査結果の報告と考察を行うこととする。

2.1. 授業目標の達成度（学生の認識）について

「英語科教育法 I」の目標として設定した15の内容（第1回目の授業で配布したシラバスにも明記した）に関して、受講生にその達成度を評価してもらった。「1」（全くそうは思わない）～「5」（大いにそう思う）までの5件法尺度を用いた。目標ごとの平均値と標準偏差を以下に示す。

- 英語教員免許取得を目指す者として、英語教員に対する当事者意識を持つことができている。英語教師の問題を自分の問題として考えることができるようになってきている。(M = 4.32, SD = 0.63)
- 英語科教育の目的として一般に唱えられていることを自分なりの言葉で説明することができる。(M = 4.01, SD = 0.70)
- 学習指導要領の概要を理解している。(M = 3.63, SD = 0.65)
- 「国際語としての英語」に関する様々な議論を理解しており、これらについて自分なりの見解を述べることができる。(M = 3.43, SD = 0.80)
- 英語教師にはどのような知識・技能・態度が必要とされるかを理解している。(M = 4.24, SD = 0.49)
- 英語教師としての力量を高めるために、具体的にどのようなことができるか (e.g. 『英語教育』に毎月目を通す) を知っている。(M = 4.16, SD = 0.65)
- 英語の授業参観を行なった場合には、英語教育について学んだことない人とは質的に異なる、専門性のあるコメントを述べるができる。(M = 3.62, SD = 0.68)
- 英語授業での指導技術 (e.g. 指名のバリエーション, 板書, 指示, 発問) について、具体的なチェックポイントを理解している。(M = 3.62, SD = 0.79)
- 学習指導案に関して、その構成、授業目標の設定の仕方、その他の重要な留意点について理解している。(M = 3.84, SD = 0.69)
- 学習指導案作成におけるターゲット文法項目であった「受動態」に関して、1) by のついていない受身の方が基本形であり、実際に多くの教科書でこの形から導入されるようになってきていること、2) 能動態の文を機械的に受動態に書き換えると不自然になる場合があること、3) 単に文法的な例文と自然な例文、効果的な例文の間には違いあること、などを理解している。(M = 4.59, SD = 0.55)
- 授業のウォームアップ活動として、What's this?, One-minute Chat, ビンゴ, チャンツ, Last Sentence Dictation, 弾丸インプットなどを実際に体験し、その意義と留意点について理解している。(M = 4.57, SD = 0.73)
- オーラル・イントロダクションの留意点を理解している。(M = 3.92, SD = 0.76)
- Read and Look-up, Overlapping, Step-up Dialogue, Shadowing などの音読指導のバリエーション、及び音読指導の留意点を理解し

ている。(M= 4.14, SD= 0.61)

14. 「返り読み」に対する) フレーズ・リーディングや発展活動である Sight Translation や Listen and Translate (英語 \leftrightarrow 日本語) について理解している。(M= 4.46, SD= 0.61)
15. 英語教師になるための自分自身によるトレーニング・プログラムを持っている。(M= 4.65, SD= 0.54)

これらの結果は、あくまで受講生の認識を反映したものであり、実際の達成度とは必ずしも言えないことを踏まえた上で、以下考察してみたい。

全体的には、全ての目標について、平均値が「3」(中央値)を超えており、特に授業の終盤に行った活動に関連する目標については平均値が4を上回り、ほとんどの受講生によって達成できたと認識されている。この結果は、授業担当者である私の実感ともおおよそ一致している。

反対に、相対的に平均値が低いのは学習指導要領の内容の理解、「国際語としての英語」を巡る議論の理解、専門的な授業分析などに関する目標である。これらの目標を達成するための活動に十分な時間を割けていないことが主な原因と考えられる。状況の劇的な改善は困難かも知れないが、授業用 Study Guide に工夫を凝らすこと等を通して対応したいと考える。Study Guide とは、課題リーディングのチェックポイントや授業中でグループ討論の対象とする論点を提示したものであり、各テーマ単元が始まる前に受講生に配布している。この Study Guide の課題・質問などを再検討し、より具体的にどのようなポイントを理解しておかなければならないかを捉えやすくするつもりである。さらには、知識の定着を確認するための簡単な小テスト等を実施することも検討すべきなのかも知れない。(現在は、他にも課題が多い、静的な知識の暗記を重視している訳ではないなどの理由で実施していない。)

また、この授業に対して15の目標を立てたが、(1) これらが「英語科教育法 I」の目標として妥当なものであるかどうか、(2) 授業時間の制約を考え合わせ目標をより絞り込む必要はないか(「英語科教育法 I」は教育法 1~4の縮図的な意味合いを持たせるために、あまりに多くの内容を詰め込みすぎている可能性もある)、(3) それぞれの目標をどのレベルまで達成することを目指すのか、(4) 他の重要な目標がもれていないか(例えば、「能力」(~できる)に関する目標を他にも多く設定すべきか)などの点も検討する必要がある。

2.2. 授業全体に関する評価

全体として、この授業は受講生に大変高い評価を受けた。学生の感想には「本音を言うと、前期の授業の中で一番しんどい(?)授業でした。でも、一番何をやったのか、自分がどう変わったのか自信を持って言えるようになった授業だと思います」や「毎回、この授業では気がつけば12時!という感じで、時間が経つのが早かったです。楽しんだり、考えさせられたり、必死になっていたりしていました。明らかに他の授業とは違って、他の人の考えを聞いたり、共有したりすることができ、自分の身になったことが多くあったと思います」などの感想が含まれている。授業内容のみならず授業方法が参考になったという感想もいくつか見られ、授業担当者の授業の仕方や授業態度を受講生は注意して見ていると改めて感じた。

もちろん、この授業には課題も多く残っている。実際に、「もしあなたがこの授業担当者だったとしたら、授業のどこをどのように変えますか。」という質問に対しても、様々な回答が寄せられた。

比較的多かったのは、受講上の基本的なルール(その徹底)に関するものである。具体的には、「遅刻をした人をもう少し厳しく取り締まってもいいと思う」や「授業準備をしているかどうか毎時間チェックするシステムを作る」などである。遅刻や授業準備に関するルールは、配布したシラバスの中にも明記し、授業でも何度か言及しているのであるが、その徹底が不十分であったのかも知れない。この授業ではグループ討論を行う機会が多く、講義型授業に比べて、ある受講生の準備不足が他の受講生の不利益につながる度合いが大きくなるのは確かである。相手が大学生であるので、できるだけ「予習チェック」のような形はとりたくないと考えており、何か他の方法で、確実に授業準備がなされるような仕組みが作れないか、現在考案中である。

もう1つ気になった回答は、『「英語教師になるとこんな素晴らしいことが待っている』ということも、先生が感じる範囲でもっと聞いてみたかった気がします』というものである。学期を通して(特に前半)、受講生の甘い認識を改めさせ、また教職への当事者意識を持たせるための様々な工夫を行った。これは重要なことだと考えており、実際に「教職への当事者意識」に関する目標の達成度は高いのであるが、他方で、英語教員の魅力について十分に受講生に伝えられたとは思えない。教職への当事者意識・責任感の育成と教職への意欲付けをよりバランスよく行っていかなければならないと感じている。